

WORDS: アントナン・アルトー 「ヴァン・ゴッホ」

ヴァン・ゴッホのつねに活動を続けている透視力にくらべれば、精神病学などというものは、もはやゴリラどものたむろする世界にすぎぬ。そしてこのゴリラども自身、脅迫観念につきまとわれ、責めさいなまれているのだが、彼らは、いかにも人間くさい不安や憂鬱が生み出すこの上なくおそるべき状態を一時的にごまかすために、こっけいな、専門用語法しか持ちあわせていないのである。

これこそ、彼らのいたんだ頭脳が生み出した、ゴリっぱな産物だ。(ヴァン・ゴッホ 87)

小田晋という、マスコミ御用達の精神病学者は、たしかに、アルトーのいう「ゴリラどものたむろする世界」にたむろするゴリラどもの一員で、「こっけいな専門用語法しか持ちあわせていないのである」。hideの自殺を、「報告例は少ないが、酒を飲んで寝て目の覚め際に朦朧状態になるエルペノル症候群(アルコール寝ぼけ)か、ブラックアウト(記憶喪失)をとまなう異常酩酊の可能性がある。いずれも正常な意思とは無関係です。遺書もないし、彼が意識して死のうとしたのなら、トランクスにランニングシャツという格好では死なないでしょう」(週刊朝日・5月22日)などと言っているのが、なにより証拠だ。

なんじゃ、この「エルペノル症候群」た？ 「アルコール寝ぼけ」だ？

「遺書もないし、彼が意識して死のうとしたのなら、トランクスにランニングシャツという格好では死なないでしょう」などと。寝ぼけてるのは小田晋、お前だ。

「エルペノル症候群」。これこそ、「こっけいな専門用語」。ゴリラどもの「いたんだ頭脳が生み出した、ゴリっぱな産物」にすぎない。

そんな、ゴリラどものいたんだ頭脳の産物をちょうだいして、「hide葬儀の異常性」などという一文をものにして井尻千男などは、さしずめチンパンジーってところか。

井尻千男は、自分の連載コラム「世間漫録」で、「そもそも築地本願寺はじまって以来といわれるほどの行列ができたこと自体が異常なものである。三十三歳のロックンローラーが深酒の末に『エレペノル症候群』(小田晋氏の推論)に陥って自殺したにすぎないのだ。国民的英雄でもなんでもない。そういう若者の告別式に数万人のファンがおしかけたという構造自体が異常なものである。小生、安易な同情よりも正直な無理解をもってよしとする人間だから判った風なことはいわない。(中略)男たるもの三十代も半ばに近づけば、青春という愚行の季節に決着をつけたくなるものだ。ビジュアル系ロックバンドの草分け的存在といわれて奇抜な恰好をすること自体が鬱陶しくなるとして無理はない。そういうときに『エレペノル症候群』がしのびよる」(週刊新潮・5月21日)と書いている。

「判った風なことはいわない」とほごきながら、わかったふうなことをほざいている。hideの告別式に数万人のファンがおしかけ、泣いたりわめいたりするのが異常か？ それこそ、「青春という愚行の季節」のありふれた愚行のひとつにすぎない。それに、芸能人や有名人の告別式におしかけるという愚行をおかすのはなにも若者にかぎったことじゃない。「五月七日、東京。築地本願寺で営まれた葬儀・告別式には、全国から五万人ものファンが参列した。美空ひばりさんを抜き、史上最高を記録した」(週刊文春・5月21日)ということなのだから、美空ひばりの告別式におしかけたファンも大勢いたわけだ。それだって立派に愚行じゃないのか？ それとも、美空ひばりは国民的英雄だともいうのか？ 「青春という愚行の季節に決着をつける」ってことは、この井尻千男みたいに、hideの自殺を、「深酒の末に『エレペノル症候群』に陥って自殺したにすぎない」などと、わかりもしないのに、わかったようなことをマスコミを通じてほざいたりするような中年(老年)の愚行の季節に突入するってことじゃない。どうして自殺したのか、などということは、他人にはうかがい知れないのだということ、を、わかるようになるってことだ。わからないことは黙っている、と、わかまえられるようになるってことだ。



小田晋や、井尻千男のようなゴリラやチンパンジーどもは、それと気づかずに、死ぬまで愚行の季節のなかで生きて、この世にのさばり、ゴリラやチンパンジーどもがのさばるこの世に生きていることをひどくつらく感じる人間がいるということに対して、まったく無知無味の輩なのである。

心が、おのれが落ちこんだ行きづまり状態をおそろしくははっきりと感ずる日があるものだ、そのために、その心は、自分にはもうこれ以上やっていけないという考えを、まるで日射病のように頭上に感ずるのだ。(ヴァン・ゴッホ 35)

時として、何かある単純な矛盾があったというだけのことで自殺してしまうような意識があるものだ。そのためには、はっきりそれとわかる、分類ずみの狂人である必要はない。それどころか、健康で、それなりの理由があれば充分なのである。

もしこの私が、同じような立場におかれて、これまでもよくあったように『アルトーさん、あなたは錯乱している』などということばをきいたら、もはや、何か罪を犯さずにはおれないだろう。そして、ヴァン・ゴッホは、そう言われるのをきいた。そしてまさしくそれゆえに、のどもとあの血のかたまりがこみあげ、それが、彼を殺してしまったのだ。(ヴァン・ゴッホ 66~67)

CD: THE VANITY [KICK THE OVERGROUND BEAT]



ものごとは、始めるより続けることのほうがむずかしい。真剣に続けることはもっとむずかしい。

THE VANITYのライブをはじめて見たのが、1994年7月4日。ヘヴィで疾走感のある演奏がすばらしく、それ以来、東京にツアーに来るとだいたいライブに足を運んでいるのだが、ライブを見るたびに感じることは、演奏のすばらしさだけでなく、THE VANITYが真剣にバンド活動を続けているということである。それは、神戸の大震災で活動停止を余儀なくされても、再開を果たし、それから精力的に活動を続けているという下記の資料を読んでもよくわかることである。それに、遠くからツアーで来るバンドのライブは、互いの無事(生きているということ、やり続けているということ)を確認するような喜びがある。

今回出したマキシ・シングル『KICK THE OVERGROUND BEAT』は、ライブではほとんど聴きとれない歌詞はよく聴こえるのだが、ライブのときの重量感がないのが残念な気がする。



THE VANITY
VO.KAZUTO, G.HITOSHI, B.MATSUMOTO, Dr.YOSHINOBU

'88年、VO・KAZUTO・Dr・YOSHINOBUの二人を中心に、THE VANITYを結成し、地元・チキンジョージを中心に活動を始める。
'92年、「LIVE J-P」より、9曲入りのファーストアルバムをリリースし、活動の幅を関東、中国地方に広げ、特に関東地方には毎月ツアーを行い、確実に動員を伸ばすが、セカンドアルバム制作の準備中、「関西、淡路大震災」にあい活動の停止を余儀なくされる。
'97年、G・HITOSHI・B・MATSUMOTOが加わり現在のメンバーになり神戸、大阪を中心に活動を再開すると共に東京ツアーも始める。
'98年、5月・XXX RECORDSより新生・VANITYとしての4曲入りのファーストマキシCD「KICK THE OVERGROUND BEAT」をリリースする。
楽曲は、バンドを主体にラステック、ウェスタン等をおり混ぜたサウンドに日本語の歌詞をのせた物が主体になっている。

LIVE: ケニー・ウェイン・シェパード・バンド 1998.4.18 渋谷クラブ・クアトロ

1995年、ケニー・ウェイン・シェパードが18歳でデビューしたときのアルバム『LEDBETTER HEIGHTS』を聴いたときには、CDの宣伝文句のとおり「本格派ブルース・ギタリスト」だと感じたし、ジェームス・ブラウンが「奴はとてつもなくソウルを持っている」と言ったということにもなげた。けれども、渋谷クアトロでケニー・ウェイン・シェパード・バンドを聴いて思ったことは、「このギターは、心からではなくて、指から出ている」ということだった。ちゃんと演奏しているのに、どうして心(ソウル)が全然感ぜられないのだろうと考えているうちに、ゲイリー・ムーアが、1990年に『STILL GOT THE BLUES』という、ブルースのアルバムを出したときのインタビューで、「ブルースは極度の集中力が要求されるから、多くの人がプレイできないのかもしれない。本気で取組み、テクニックのことなんか忘れて、スケールのことも考えずにやらなきゃいけないし……。考えてしまうと音楽の流れを止めてしまうからね」と言っていたことを思い出した。この日のケニー・ウェイン・シェパードは、テクニック(指)の方が勝っていたのかもしれない。だから、ギターは指から出ているように思えたのだろう。

テクニックを獲得するのもむずかしいことだろうけれど、それを忘れて演奏するというのは至難の技にちがいない。アルバム・タイトルにもなっているゲイリー・ムーアの『STILL GOT THE BLUES』という曲を聴くと、ギターテクニックのことなどには全く気がいかず、心に流れこんできた音楽に、ただただ浸っていられるのである。

